



の中の

子どもたち

第16回 メイジーの瞳

一過不足な愛の行く末

川崎 二三彦

面接

唐突かも知れないが、本作を観ながら、なぜか思い出したのは、ある面接の逐語記録である。

*

福祉司：そんならお父さんは、「子どもは自分の血を分けた分身だから離すことは出来ない。お前に身を引いて貰うより外ない」とおっしゃったらいゝでしょう。そうおっしゃいましたか？

父：いゝえ、そう云ってしまえば、家内は帰ってしまうでしょう。帰られると、女中を備うことも出来ないから、私は困るのです。女中を使うのはもうこりごりです。

福祉司：それでは奥さんは女中がわりです。奥さんの人格を無視し、奥さんを道具扱いにしていると同じですね。

父：まあ、そんな……

福祉司：もし私が奥さんだったら、そんな結婚はいやになりますね。

*

なんだこれは？ という疑問や批判の声が聞こえてきそうだが、この面接は、児童福祉法によって戦後直後に設立された児童相談所における黎明期の面接の一コマで、本記録が掲載されて



いる研究紀要には、当該児童福祉司の反省的コメントも載っている。

父母の平等

それはともかく、海外も飛び回る画商の父と夜の仕事や地方公演も多いロック歌手の母。すれ違い夫婦の離婚によって6歳のメイジーの親権が争われ、父母が10日間ずつ交代で養育するという裁判所決定が、この物語の出発点となる。本当は私は、いかに共同親権とはいえ、いかに父母を平等に扱うとしても、裁判所はよくもこんな生活スタイルを決めたものだと思った。なぜとって、これじゃあ主人公のメイジーは、自分が<誰の子>であるかはわかって、自分が<どこの子>かがわからなくなって、とても落ち着いた生活はできまいと感じたからである。それともアメリカではこれが普通なんだろうか……。などとこだわっていたら映画の展開についていけないので、先へ進もう。

離婚後、住居を移したメイジーと父との暮らしの第一歩は、それまでベビーシッターだった女性の登場から始まる。父は彼女と結婚し、メイジーもそれを受け入れるのだが、一方、母親にもバーテンダーとして働く新しいパートナーができる。

「メイジー、あなたのために結婚したのよ」

そうなのか、と眉につばして頷きながら、児童虐待の世界では、こういう関係とにかくリスクが生じやすいんだぞ、などと要らぬお節介をしたくなる。のだけれど、本作のこの男性、なかなかできた人物で、メイジーとも好ましい関係を築いていく。そして、

「ハハーン、この映画の趣向はそれだな」

それでは奥さんは 女中がわりです

と、いつ頃気づいたのかは覚えていないが、何しろ忙しい実父・実母である。彼らは2人とも、養育の責任を忘れて仕事にうつつを抜かし、子どもとの約束もすっぽかして養育交代時のお迎えさえ怠ってしまう。その結果、やむなく尻ぬぐいをさせられるのがそれぞれの新しいパートナーなのである。

「それでは奥さんは女中がわりです。奥さんの人格を無視し、奥さんを道具扱いにしていると同じですね」

面接でこんな言葉を口にするには、相当の勇気があるだろうが、映画で次々に現れる実父母の身勝手さを見せつけられると、思わずこんな台詞を投げつけてみたくもなるというものだ。

さて、子どもを押しつけられたパートナーたちは、行き場を失ったメイジーを目の前にして捨て置くこともできず、否応なく協力せざるを得ない。

これで行く末は見えてきた。毎日せっせとラブレターを届けていた郵便配達夫が、いつのまにか当の女性の恋人になってしまったというような映画があったかどうかは知らないけれど、この2人、いわばベビーシッター仲間として自分たちのパートナーに怒りと不信を抱き、共同してメイジーの養育に当たるようになって、気づくといつのまにか……、というわけである。

過不足な愛

それにしても、この両親の愛はどうだろう。「これじゃネグレクトと言わざるを得ない！」とため息が出るほど



の自己都合優先。にもかかわらず、たまに戻ってメイジーと顔を合わせれば強く抱きしめ、「愛している」を連発し、びっくりするようなプレゼントも用意している。

この映画で、私が最も気になったのは、作品の主題とは離れているけれど、こうした仕打ちを受けるメイジーの心だ。ただし、本作の彼女が何らかの心的ダメージを受けているといった描写はない。彼女はあくまでも、澄んだ瞳で両親や彼らのパートナーをじっと見つめるだけである。だが、

「メイジーは、いつか壊れてしまう」
彼女が無垢なる存在だけに、私は、はらはらせずにはおれなかった。

というのも、かつて一時保護した男児に、これとそっくりの状況があったから。引き取り予定の日になっても母が現れず、担当児童福祉司は母の嘘八百に振り回されてうつ状態に陥り、やっとのことで出現した母は、今度は一転、頬ずりせんばかりの愛撫。その極端さに唾然とさせられたものだが、ようやく引き取ってもらった途端、突然警察が現れ、子どもの前で母を連れて行く。けなげな子どもも、次第には情緒不安定になっていくのであった。

この映画が現代の父母の姿を象徴しているとしたら、それは確かに暗澹とせざるを得ないが、ここは映画の展開上、こんな両親像を創るしかなかったのだと、信じたい。

* 2012 / アメリカ

* 鑑賞データ 2014/02/02 TOHO シネマズ 川崎

* 公式 HP <http://maisie.gaga.ne.jp/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/35832>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ移動します。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八目目の鱈	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	